

國

憲

特70

157

031568-000-9

特70-157

国憲

上宮教会／編

M36

BBE-0187

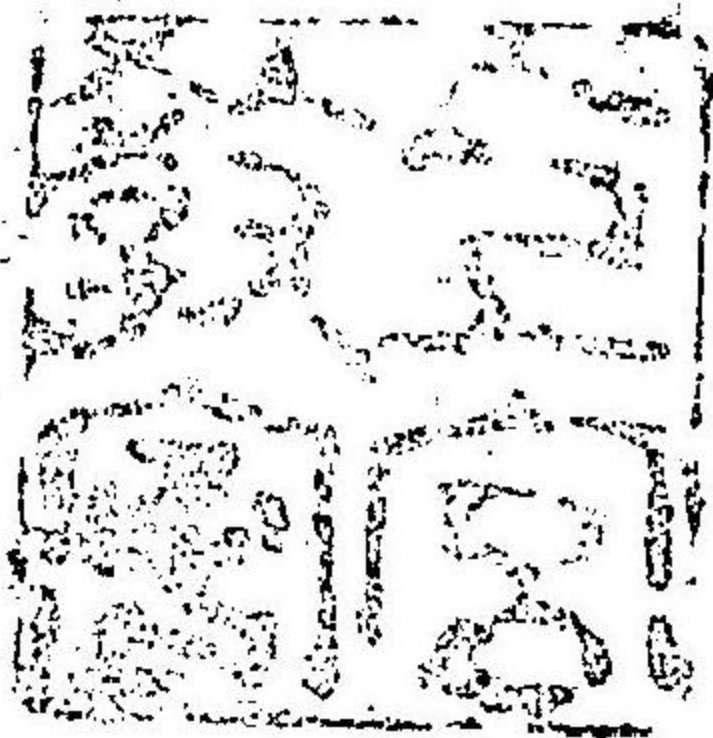




特70  
157

國

憲





## 緒言

我が

大日本帝國建國以來、憲法と稱するもの二種あり一を十七憲法と曰ひ、一を帝國憲法と曰ふ、二者の聖旨其歸一なりと雖も世運の變遷に隨ひ自から二様の形式を作す、乃ち前者は無形の道徳を旨として政務の訓誡を示し、後者は有形の法網を主として國家の組織を明かにす、譬へば猶ほ嚴父と慈母の相待ちて以て一子を生育教養するが如し、吾等國民たるもの豈この二憲を經緯として、以て天壤無窮の皇運を扶翼し、以て民庶の福利を進め、以て邦家の開明を圖らざる可けんや、蓋し帝國憲法は實に是れ國家の組織を明かにして、洩らす所なしと雖も、一たび運用の精神



を誤まるときは、君國の危殆復た之に過ぎたるは無し、而して其運用の精神は、實に十七憲法に在りて存す、然るに方今其の組織たる帝國憲法の章條は、普ねく人の熟知する所なるべしと雖も其の精神たるべき十七憲法に至りては、其何ものたるかを知悉するもの幾んど稀なり、是に於てか神聖なるべき大小の政權も往々腐敗の誹を免かれざるものあり、屢上は宸襟を惱ましたてまつり、下は民庶を疑懼の間に彷徨せしむるに至る、豈また慨歎の至りに堪ゆべけんや、且つ夫れ有形の法網は、帝國憲法の章條に詳かなりと雖も、天皇陛下の之を欽定煥發したまへる所以の精神、即ち穆々たる叡旨に至りては、憲法發布に關する詔勅告文等に於て、之を明示したまへり、然るに爾來或は帝國憲法を講解し、或は之を實地に

運用する所のもの、深く彼の當時の詔勅告文を顧りみる者あるを聞かず、如何ぞ能く叡聖慈仁の旨に副へたてまつることを得べけむや、本會夙に深く此に感慨する所あり、謹て古今二種の憲法及び帝國憲法發布に關する詔勅告文を併せて、一視拜覽することを得るの便を圖り、尙ほ維新以來時々の詔勅にして、以て之が參照たるべきもの數點を抄録し、一小冊子と作して以て同感の諸士に頒つ、冀くは之に因て以て聖旨の在る所を感戴すること有らば、有形の法網も始めて照々靈々たる精神を活動せしむることを得て、上は宸襟を安んじたてまつり、下は民庶を慰藉するに庶幾からむか讀者請ふ微衷の存する所を諒察せよ

明治三十五年



聖德皇太子薨御の日

上宮教會幹事

河瀬秀治

謹誌

四

國 憲 目 次

推古天皇

憲法……………一

今上天皇

憲法發布勅語……………十一

告文……………十三

憲法發布の詔……………十七

大日本帝國憲法……………二十二

參照

今上天皇

五箇條の誓詔……………三十三

維新の下詔……………三十四



百官將士を勉勵せしむる詔	三十七
公議所を開き制度律令を議せしむる詔	三十八
可否を獻替せしむる詔	三十九
公選の法を設け更に輔相議定參與を登庸する詔	四十
皇靈遷座の詔	四十一
議院憲法頒布の詔	四十一
元老院大審院を置く詔	四十二
地方官會議を開く詔	四十三
元老院を開く詔	四十四
元老院議長熾仁親王へ國憲起草の詔	四十五
明治二十三年を期し國會開設の勅諭	四十五

陸海軍軍人へ勅諭	四十七
伊藤參議を歐洲へ派遣し立憲國の情形を觀察せしむる勅語	六十
幼學綱要頒賜の勅諭	六十一
内閣改制の詔	六十二
皇室典範を定むる詔	六十三
教育の詔	六十四
衆議院の上奏に答へ併せて在廷の臣僚に告ぐる勅	六十五

國憲目次終



國憲

推古天皇

○憲法

十七條○推古天皇十二年四月丙寅朔戊辰○日本書紀

一曰。以和爲貴。無忤爲宗。人皆有黨。亦少達者。是以或不順君父。乍違于隣里。然上和。下睦。諧於論事。則事理自通。何事不成。

二曰。篤敬三寶。三寶者佛法僧也。則四生之



終歸萬國之極宗。何世何人。非貴是法。人鮮尤惡。能教從之。其不歸三寶。何以直柱。三日。承詔必謹。君則天之。臣則地之。天覆地載。四時順行。萬氣得通。地欲覆天。則致壞耳。是以君言。臣承。上行下靡。故承詔必慎。不謹自敗。

四日。群卿百寮。以禮爲本。其治民之本。必在于禮。上不禮而下非齊。下無禮。以必有罪。

是以君臣有禮。位次不亂。百姓有禮。國家自治。

五日。絕饗棄欲。明辨訴訟。其百姓之訟。一日千事。一日尙爾。況乎累歲頃治。訟者得利。爲常見。賄聽讞。便有財之訟。如石投水。乏者之訴。似水投石。是以貧民則不知所由。臣道亦於焉闕。

六日。懲惡勸善。古之良典。是以無匿人善。見



四  
惡必匡。其諂詐者。則爲覆國家之利器。爲  
絕人民之鋒劍。亦佞媚者。對上則好說。下  
過逢。下則誹謗。上失。其如此人。皆无忠於  
君。無仁於民。是大亂之本也。

七日。人各有任掌。宜不濫。其賢哲任官。頌音  
則起。刻者有官。禍亂則繁。世少生知。克念  
作聖。事無大小。得人必治。時無急緩。遇賢  
自寬。因此國家永久。社稷勿危。故古聖王。

爲官以求人。爲人不求官。

八日。群卿百寮。早朝晏退。公事靡盬。終日難  
盡。是以遲朝不逮于急。早退必事不盡。

九日。信是義本。每事有信。其善惡成敗。要在  
于信。君臣共信。何事不成。君臣無信。萬事  
悉敗。

十日。絕忿棄嗔。不怒人。違人皆有心。心各有  
執。彼是則我非。我是則彼非。我必非聖。彼



必非愚。共是凡夫耳。是非之理。詎能可定。相共賢愚。如環无端。是以彼人雖瞋。還恐我失。我獨雖得。從衆同舉。

十一日。明察功過。賞罰必當。日者賞不在功。罰不在罪。執事群卿。宜明賞罰。

十二日。國司國造。勿斂百姓。國靡二君。民無兩主。率土兆民。以王爲主。所任官司。皆是王臣。何敢與公。賦斂百姓。

十三日。諸任官者。同知職掌。或病或使。有闕於事。然得知之日。和如曾識。其以非與聞。勿妨公務。

十四日。群臣百寮。無有嫉妬。我既嫉人。人亦嫉我。嫉妬之患。不知其極。所以智勝於己。則不悅。才優於己。則嫉妬。是以五百歲之後。乃令遇賢。千載以難待一聖。其不得賢。聖何以治國。



八  
十五日。背私向公。是臣之道矣。凡人有私。必有恨。有憾。必非同。非同則以私妨公。憾起則違制害法。故初章云。上下和諧。其亦是情歟。

十六日。使民以時。古之良典。故冬月有間。以可使民。從春至秋。農桑之節。不可使民。其不農何食。不桑何服。

十七日。大事不可獨斷。必與衆宜論。小事是輕。不可必衆。唯逮論大事。若疑有失。故與衆相辨。辭則得理。



# 今上天皇

○憲法發布勅語

官報號外  
明治二十二年二月十一日

朕國家ノ隆昌ト臣民ノ慶福トヲ以テ  
中心ノ欣榮トシ朕カ祖宗ニ承クルノ  
大權ニ依リ現在及將來ノ臣民ニ對シ  
此ノ不磨ノ大典ヲ宣布ス  
惟フニ我カ祖我カ宗ハ我カ臣民祖先



ノ協力輔翼ニ倚リ我カ帝國ヲ肇造シ  
以テ無窮ニ垂レタリ此レ我カ神聖ナ  
ル祖宗ノ威徳ト竝ニ臣民ノ忠實勇武  
ニシテ國ヲ愛シ公ニ殉ヒ以テ此ノ光  
輝アル國史ノ成跡ヲ貽シタルナリ朕  
我カ臣民ハ卽チ祖宗ノ忠良ナル臣民  
ノ子孫ナルヲ回想シ其ノ朕カ意ヲ奉  
體シ朕カ事ヲ獎順シ相與ニ和衷協同

シ益我カ帝國ノ光榮ヲ中外ニ宣揚シ  
祖宗ノ遺業ヲ永久ニ鞏固ナラシムル  
ノ希望ヲ同クシ此ノ負擔ヲ分ツニ堪  
フルコトヲ疑ハサルナリ

○告文

官報號外  
明治二十二年二月十一日

皇朕レ謹ミ畏ミ

皇祖

皇宗ノ神靈ニ詣ケ白サク皇朕レ天壤



無窮ノ宏謨ニ循ヒ惟神ノ寶祚ヲ承繼  
シ舊圖ヲ保持シテ敢テ失墜スルコト  
無シ顧ミルニ世局ノ進運ニ膺リ人文  
ノ發達ニ隨ヒ宜ク

皇祖

皇宗ノ遺訓ヲ明徴ニシ典憲ヲ成立シ  
條章ヲ照示シ内ハ以テ子孫ノ率由ス  
ル所ト爲シ外ハ以テ臣民翼贊ノ道ヲ

廣メ永遠ニ遵行セシメ益國家ノ丕基  
ヲ鞏固ニシ八洲民生ノ慶福ヲ増進ス  
ヘシ茲ニ皇室典範及憲法ヲ制定ス惟  
フニ此レ皆

皇祖

皇宗ノ後裔ニ貽シタマヘル統治ノ洪  
範ヲ紹述スルニ外ナラス而シテ朕カ  
躬ニ逮テ時ト俱ニ舉行スルコトヲ得



ルハ洵ニ

皇祖

皇宗及我カ

皇考ノ威靈ニ倚藉スルニ由ラサルハ

無シ皇朕レ仰テ

皇祖

皇宗及

皇考ノ神祐ヲ禱リ併セテ朕カ現在及

將來ニ臣民ニ率先シ此憲章ヲ履行シ

テ愆ラサラムコトヲ誓フ庶幾クハ

神靈此レヲ鑒ミタマヘ

○大日本帝國憲法發布ノ詔

官報明治二十二年二月十一日

朕祖宗ノ遺烈ヲ承ケ萬世一系ノ帝位

ヲ踐ミ朕カ親愛スル所ノ臣民ハ即チ

朕カ祖宗ノ惠撫慈養シタマヒシ所ノ

臣民ナルヲ念ヒ其康福ヲ増進シ其懿



德良能ヲ發達セシメムコトヲ願ヒ又  
其翼贊ニ依リ與ニ俱ニ國家ノ進運ヲ  
扶持セムコトヲ望ミ乃チ明治十四年  
十月十二日ノ詔命ヲ履踐シ茲ニ大憲  
ヲ制定シ朕カ率由スル所ヲ示シ朕カ  
後嗣及臣民及臣民ノ子孫タル者ヲシ  
テ永遠ニ循行スル所ヲ知ラシム  
國家統治ノ大權ハ朕カ之ヲ祖宗ニ承

ケテ之ヲ子孫ニ傳フル所ナリ朕及朕  
カ子孫ハ將來此憲法ノ條章ニ循ヒ之  
ヲ行フコトヲ愆ラサルヘシ  
朕ハ我カ臣民ノ權利及財產ノ安全ヲ  
貴重シ及之ヲ保護シ此憲法及法律ノ  
範圍内ニ於テ其享有ヲ完全ナラシム  
ヘキコトヲ宣言ス

帝國議會ハ明治二十三年ヲ以テ之ヲ



召集シ議會開會ノ時ヲ以テ此憲法ヲ  
シテ有效ナラシムルノ期トスヘシ  
將來若此憲法ノ或ル條章ヲ改定スル  
ノ必要ナル時宜ヲ見ルニ至ラハ朕及  
朕カ繼續ノ子孫ハ發議ノ權ヲ執リ之  
ヲ議會ニ付シ議會ハ此憲法ニ定メタ  
ル要件ニ依リ之ヲ議決スルノ外朕カ  
子孫及臣民ハ敢テ之カ紛更ヲ試ミル

コトヲ得サルヘシ  
朕カ在廷ノ大臣ハ朕カ爲ニ此憲法ヲ  
施行スルノ責ニ任スヘク朕カ現在及  
將來ノ臣民ハ此憲法ニ對シ永遠ニ從  
順ノ義務ヲ負フヘシ



# ○大日本帝國憲法

## 第一章 天皇

- 第一條 大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス
  - 第二條 皇位ハ皇室典範ノ定ムル所ニ依リ皇男子孫之ヲ繼承ス
  - 第三條 天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス
  - 第四條 天皇ハ國ノ元首ニシテ統治權ヲ總攬シ此ノ憲法ノ條規ニ依リ之ヲ行フ
  - 第五條 天皇ハ帝國議會ノ協贊ヲ以テ立法權ヲ行フ
  - 第六條 天皇ハ法律ヲ裁可シ其ノ公布及執行ヲ命ス
  - 第七條 天皇ハ帝國議會ヲ召集シ其ノ開會閉會停會及衆議院ノ解散ヲ命ス
  - 第八條 天皇ハ公共ノ安全ヲ保持シ又ハ其災厄ヲ避クル爲緊急ノ必要ニ由リ帝國議會閉會ノ場合ニ於テ法律ニ代ルヘキ勅令ヲ發ス
- 此勅令ハ次ノ會期ニ於テ帝國議會ニ提出スヘシ若議會ニ於テ承諾セサルトキ政府ハ將來ニ向テ其ノ效力ヲ失フコトヲ公布スヘシ

- 第九條 天皇ハ法律ヲ執行スル爲ニ又ハ公共ノ安寧秩序ヲ保持シ及臣民ノ幸福ヲ増進スル爲ニ必要ナル命令ヲ發シ又ハ發セシム但シ命令ヲ以テ法律ヲ變更スルコトヲ得ス
- 第十條 天皇ハ行政各部ノ官制及文武官ノ俸給ヲ定メ及文武官ヲ任免ス但シ此憲法又ハ他ノ法律ニ特例ヲ掲ケタルモノハ各其ノ條項ニ依ル
- 第十一條 天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス
- 第十二條 天皇ハ陸海軍ノ編制及常備兵額ヲ定ム
- 第十三條 天皇ハ戰ヲ宣シ和ヲ講シ及諸般ノ條約ヲ締結ス
- 第十四條 天皇ハ戒嚴ヲ宣告ス
- 第十五條 戒嚴ノ要件及效力ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム
- 第十六條 天皇ハ爵位勳章及其他ノ榮典ヲ授與ス
- 第十七條 天皇ハ大赦特赦減刑及復權ヲ命ス
- 攝政ハ天皇ノ名ニ於テ大權ヲ行フ



第二章 臣民權利義務

第十八條 日本臣民タルノ要件ハ法律ノ定ムル所ニ依ル

第十九條 日本臣民ハ法律命令ノ定ムル所ノ資格ニ應シ均ク文武官ニ任セラレ

及其ノ他ノ公務ニ就クコトヲ得

第二十條 日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ兵役ノ義務ヲ有ス

第二十一條 日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ納税ノ義務ヲ有ス

第二十二條 日本臣民ハ法律ノ範圍内ニ於テ居住及移轉ノ自由ヲ有ス

第二十三條 日本臣民ハ法律ニ依ルニ非スシテ逮捕監禁審問處罰ヲ受クルコト

ナシ

第二十四條 日本臣民ハ法律ニ定メタル裁判官ノ裁判ヲ受クルノ權ヲ奪ハルル

コトナシ

第二十五條 日本臣民ハ法律ニ定メタル場合ヲ除ク外其ノ許諾ナクシテ住所ニ

侵入セラレ及搜索セラルルコトナシ

第二十六條 日本臣民ハ法律ニ定メタル場合ヲ除ク外信書ノ祕密ヲ侵サルルコ

トナシ

第二十七條 日本臣民ハ其所有權ヲ侵サルルコトナシ公益ノ爲必要ナル處分ハ

法律ノ定ムル所ニ依ル

第二十八條 日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨ケス及臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於

テ信教ノ自由ヲ有ス

第二十九條 日本臣民ハ法律ノ範圍内ニ於テ言論著作印行集會及結社ノ自由ヲ

有ス

第三十條 日本臣民ハ相當ノ敬禮ヲ守リ別ニ定ムル所ノ規程ニ從ヒ請願ヲ爲ス

コトヲ得

第三十一條 本章ニ掲ケタル條規ハ戰時又ハ國家事變ノ場合ニ於テ天皇大權ノ

施行ヲ妨クルコトナシ

第三十二條 本章ニ掲ケタル條規ハ陸海軍ノ法令又ハ紀律ニ牴觸セサルモノニ

限リ軍人ニ準行ス

第三章 帝國議會



第三十三條 帝國議會ハ貴族院衆議院ノ兩院ヲ以テ成立ス

第三十四條 貴族院ハ貴族院令ノ定ムル所ニ依リ皇族及勅任セラレタル議員ヲ以テ組織ス

第三十五條 衆議院ハ選舉法ノ定ムル所ニ依リ公選セラレタル議員ヲ以テ組織ス

第三十六條 何人モ同時ニ兩議院ノ議員タルコトヲ得ス

第三十七條 凡テ法律ハ帝國議會ノ協贊ヲ經ルヲ要ス

第三十八條 兩議院ハ政府ノ提出スル法律案ヲ議決シ及各法律案ヲ提出スルコトヲ得

第三十九條 兩議院ノ一ニ於テ否決シタル法律案ハ同會期中ニ於テ再ヒ提出スルコトヲ得ス

第四十條 兩議院ハ法律又ハ其ノ他ノ事件ニ付各其ノ意見ヲ政府ニ建議スルコトヲ得但シ其ノ採納ヲ得サルモノハ同會期中ニ於テ再ヒ建議スルコトヲ得ス

第四十一條 帝國議會ハ每年之ヲ召集ス

第四十二條 帝國議會ハ三箇月ヲ以テ會期トス必要アル場合ニ於テハ勅命ヲ以テ之ヲ延長スルコトアルヘシ

第四十三條 臨時緊急ノ必要アル場合ニ於テ常會ノ外臨時會ヲ召集スヘシ臨時會ノ會期ヲ定ムルハ勅命ニ依ル

第四十四條 帝國議會ノ開會閉會會期ノ延長及停會ハ兩院同時ニ之ヲ行フヘシ衆議院解散ヲ命セラレタルトキハ貴族院ハ同時ニ停會セララルヘシ

第四十五條 衆議院解散ヲ命セラレタルトキハ勅命ヲ以テ新ニ議員ヲ選舉セシメ解散ノ日ヨリ五箇月以内ニ之ヲ召集スヘシ

第四十六條 兩議院ハ各其ノ總議員三分ノ一以上出席スルニ非サレハ議事ヲ開キ議決ヲ爲スコトヲ得ス

第四十七條 兩議院ノ議事ハ過半數ヲ以テ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第四十八條 兩議院ノ會議ハ公開ス但シ政府ノ要求又ハ其ノ院ノ決議ニ依リ秘密會ト爲スコトヲ得



第四十九條 兩議院ハ各天皇ニ上奏スルコトヲ得

第五十條 兩議院ハ臣民ヨリ呈出スル請願書ヲ受クルコトヲ得

第五十一條 兩議院ハ此ノ憲法及議院法ニ掲クルモノノ外内部ノ整理ニ必要ナル諸規則ヲ定ムルコトヲ得

第五十二條 兩議院ノ議員ハ議院ニ於テ發言シタル意見及表決ニ付院外ニ於テ責ヲ負フコトナシ但シ議員自ラ其言論ヲ演說刊行筆記又ハ其ノ他ノ方法ヲ以テ公布シタルトキハ一般ノ法律ニ依リ處分セララルヘシ

第五十三條 兩議院ノ議員ハ現行犯罪又ハ内亂外患ニ關ル罪ヲ除ク外會期中其ノ院ノ許諾ナクシテ逮捕セララルコトナシ

第五十四條 國務大臣及政府委員ハ何時タリトモ各議院ニ出席シ及發言スルコトヲ得

第四章 國務大臣及樞密顧問

第五十五條 國務各大臣ハ天皇ヲ輔弼シ其責ニ任ス

凡テ法律勅令其ノ他國務ニ關ル詔勅ハ國務大臣ノ副署ヲ要ス

第五十六條 樞密顧問ハ樞密院官制ノ定ムル所ニ依リ天皇ノ諮詢ニ應ヘ重要ノ國務ヲ審議ス

第五章 司法

第五十七條 司法權ハ天皇ノ名ニ於テ法律ニ依リ裁判所之ヲ行フ

裁判所ノ構成ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第五十八條 裁判官ハ法律ニ定メタル資格ヲ具フル者ヲ以テ之ニ任ス

裁判官ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルノ外其ノ職ヲ免セララルコトナシ懲戒ノ條規ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第五十九條 裁判ノ對審判決ハ之ヲ公開ス但シ安寧秩序又ハ風俗ヲ害スルノ虞アルトキハ法律ニ依リ又ハ裁判所ノ決議ヲ以テ對審ノ公開ヲ停ムルコトヲ得

第六十條 特別裁判所ノ管轄ニ屬スヘキモノハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第六十一條 行政官廳ノ違法處分ニ由リ權利ヲ傷害セラレタルトスルノ訴訟ニシテ別ニ法律ヲ以テ定メタル行政裁判所ノ裁判ニ屬スヘキモノハ司法裁判所ニ於テ受理スルノ限ニ在ラス



第六章 會計

第六十二條 新ニ租稅ヲ課シ及稅率ヲ變更スルハ法律ヲ以テ之ヲ定ムヘシ  
但シ報償ニ屬スル行政上ノ手数料及其ノ他ノ收納金ハ前項ノ限ニ在ラス  
國債ヲ起シ及豫算ニ定メタルモノヲ除ク外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ爲ス  
ハ帝國議會ノ協贊ヲ經ヘシ

第六十三條 現行ノ租稅ハ更ニ法律ヲ以テ之ヲ改メサル限ハ舊ニ依リ之ヲ徵收  
ス

第六十四條 國家ノ歲入ハ毎年豫算ヲ以テ帝國議會ノ協贊ヲ經ヘシ  
豫算ノ款項ニ超過シ又ハ豫算ノ外ニ生シタル支出アルトキハ後日帝國議會ノ  
承諾ヲ求ムルヲ要ス

第六十五條 豫算ハ前ニ衆議院ニ提出スヘシ

第六十六條 皇室經費ハ現在ノ定額ニ依リ毎年國庫ヨリ之ヲ支出シ將來増額ヲ  
要スル場合ヲ除ク外帝國議會ノ協贊ヲ要セス

第六十七條 憲法上ノ大權ニ基ツケル既定ノ歲出及法律ノ結果ニ由リ又ハ法律

上政府ノ義務ニ屬スル歲出ハ政府ノ同意ヲクシテ帝國議會之ヲ廢除シ又ハ削  
減スルコトヲ得ス

第六十八條 特別ノ須要ニ因リ政府ニ豫メ年限ヲ定メ繼續費トシテ帝國議會ノ  
協贊ヲ求ムルコトヲ得

第六十九條 避クヘカラサル豫算ノ不足ヲ補フ爲ニ又ハ豫算ノ外ニ生シタル必  
要ノ費用ニ充ツル爲ニ豫備費ヲ設クヘシ

第七十條 公共ノ安全ヲ保持スル爲緊急ノ需用アル場合ニ於テ内外ノ情形ニ因  
リ政府ハ帝國議會ヲ召集スルコト能ハサルトキハ勅命ニ依リ財政上必要ノ處  
分ヲ爲スコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ次ノ會期ニ於テ帝國議會ニ提出シ其ノ承諾ヲ求ムルヲ要  
ス

第七十一條 帝國議會ニ於テ豫算ヲ議定セス又ハ豫算成立ニ至ラサルトキハ政  
府ハ前年度ノ豫算ヲ施行スヘシ

第七十二條 國家ノ歲出歲入ノ決算ハ會計検査院之ヲ検査確定シ政府ハ其ノ檢



查報告ト俱ニ之ヲ帝國議會ニ提出スヘシ  
會計検査院ノ組織及職權ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第七章 補則

第七十三條 將來此ノ憲法ノ條項ヲ改正スルノ必要アルトキハ勅命ヲ以テ議案  
ヲ帝國議會ニ付スヘシ

此ノ場合ニ於テ兩議院ハ各其ノ總員三分ノ二以上出席スルニ非サレハ議事ヲ  
開クコトヲ得ス出席議員三分ノ二以上ノ多數ヲ得ルニ非サレハ改正ノ議決ヲ  
爲スコトヲ得ス

第七十四條 皇室典範ノ改正ハ帝國議會ノ議ヲ經ルヲ要セス

皇室典範ヲ以テ此ノ憲法ノ條規ヲ變更スルコトヲ得ス

第七十五條 憲法及皇室典範ハ攝政ヲ置クノ間之ヲ變更スルコトヲ得ス

第七十六條 法律規則命令又ハ何等ノ名稱ヲ用非タルニ拘ラス此憲法ニ矛盾セ  
サル現行ノ法令ハ總ヲ遵由ノ效力ヲ有ス

歲出上政府ノ義務ニ係ル現在ノ契約又ハ命令ハ總テ第六十七條ノ例ニ依ル

# 今上天皇

○五箇條ノ誓詔憲法類編  
明治元年三月十四日

- 一 廣ク會議ヲ起シ萬機公論ニ決スヘシ
  - 一 上下心ヲ一ニシ盛ニ經綸ヲ行フヘシ
  - 一 官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦  
マサラシメンコトヲ要ス
  - 一 舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ
  - 一 智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ
- 我國未曾有ノ變革ヲ爲ントシ朕躬ヲ以テ衆ニ先ンシ



天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立  
ントス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ

○維新ノ下詔憲法類編  
明治元年三月十四日

朕幼弱ヲ以テ粹ニ大統ヲ紹キ爾來何ヲ以テ萬國ニ對  
立シ列祖ニ事ヘ奉ランヤト朝夕恐懼ニ堪サルナリ竊  
ニ考ルニ中葉朝政衰ヘテヨリ武家權ヲ專ラニシ表ハ  
朝廷ヲ推尊シテ實ハ敬シテ是ヲ遠ケ億兆ノ父母トシ  
テ絶テ赤子ノ情ヲ知ルコト能ハサル様計リ成シ遂ニ  
億兆ノ君タルモ唯名ノミニ成リ果テ其カ爲今日朝廷  
ノ尊重ハ古ヘニ倍セシカ如クニテ朝威ハ倍衰ヘ上下

相離ルルコト霄壤ノ如シカカル形勢ニテ何ヲモツテ  
天下ニ君臨センヤ今般朝政一新ノ時ニ膺リ天下億兆  
一人モ其處ヲ得サル時ハ皆朕カ罪ナレハ今日ノ事朕  
自身骨ヲ勞シ心志ヲ苦メ艱難ノ先ニ立古列祖ノ盡サ  
セ給ヒシ蹤ヲ履ミ治蹟ヲ勤メテコソ始テ天職ヲ奉シ  
テ億兆ノ君タル所ニ背カサルヘシ往昔列祖萬機ヲ親  
ラシ不臣ノモノアレハ自ラ將トシテコレヲ征シ給ヒ  
朝廷ノ政總テ簡易ニシテ如此尊重ナラサルユヘ君臣  
相親シミテ上下相愛シ德澤天下ニ洽ク國威海外ニ耀  
キシナリ然ルニ近來宇内大ニ開ケ各國四方ニ相雄飛



スルノ時ニ當リ獨我ノミ世界ノ形勢ニ疏ク舊習ヲ固  
 守シ一新ノ效ヲハカラス朕徒ラニ九重中ニ安居シ一  
 日ノ安キヲ偷ミ百年ノ憂ヲ忘ルルトキハ遂ニ各國ノ  
 凌侮ヲ受ケ上ハ列聖ヲ辱シメ奉リ下ハ億兆ヲ苦メン  
 コトヲ恐ル故ニ朕ココニ百官諸侯ト廣ク相誓ヒ列祖  
 ノ御偉業ヲ繼述シ一身ノ艱難辛苦ヲ問ハス親ラ四方  
 ヲ經營シ汝億兆ヲ安撫シ遂ニハ萬里ノ波濤ヲ拓開シ  
 國威ヲ四方ニ宣布シ天下ヲ富岳ノ安キニ置ンコトヲ  
 欲ス汝億兆舊來ノ陋習ニ慣レ尊重ノミヲ朝廷ノ事ト  
 ナシ神州ノ危急ヲシラス朕一タヒ足ヲ舉レハ非常ニ

驚キ種々ノ疑惑ヲ生シ萬口紛紜トシテ朕カ志ヲナサ  
 サラシムル時ハ是レ朕ヲシテ君タル道ヲ失ハシムル  
 ノミナラス從テ列祖ノ天下ヲ失ハシムルナリ汝億兆  
 能々朕カ志ヲ體認シ相率テ私見ヲ去リ公儀ヲ採リ朕  
 カ業ヲ助ケテ神州ヲ保全シ列聖ノ神靈ヲ慰シ奉ラシ  
 メハ生前ノ幸甚ナラン

○百官將士ヲ勉勵セシムル詔 憲法類編 明治二年正月四日

朕惟ミルニ在昔神皇基ヲ肇メシヨリ列聖相繼キ以テ  
 朕カ躬ニ逮フ朕否德夙夜競業先皇ノ緒ヲ墜サンコト  
 ナ懼ル曩者兇賊命ニ梗シ億兆塗炭ニ苦シム幸ニ汝百



官將士ノ力ニ頼リ速ニ戡定ノ功ヲ奏シ萬姓堵ヲ安ス  
ルニ至ル今茲歲在己巳三元啓端上下又寧遠邇來賀ス  
朕何ノ慶カ之ニ如シ惟フニ天道靡常一治一亂内安ケ  
レハ必外ノ患アリ豈ニ戒慎セサル可シヤ朕益々祖業  
ヲ恢弘シ覃テ中外ニ被ラシメ以テ永ク先皇ノ威徳ヲ  
宣揚センコトヲ庶幾ス汝百官將士勉勵不懈各其職ヲ  
竭シ敢テ忌憚ナク朕カ闕漏ヲ匡救セヨ汝百官將士其  
勉旃

○公議所ヲ開キ制度律令ヲ議セシム

ル詔 明治政要  
明治二年二月二十五日

朕將ニ東臨公卿群牧ヲ會合シ博ク衆議ヲ諮詢シ國家  
治安ノ大基ヲ建ントス抑制度律令ハ政治ノ本億兆ノ  
頼トコロ以テ輕シク定ムヘカラス今ヤ公議所法則畧  
既ニ定ルト奏ス宜シク速ニ開局シ局中禮法ヲ貴ヒ協  
和ヲ旨トシ心ヲ公平ニ存シ議ヲ精確ニ期シ專ラ皇祖  
ノ遺典ニ基キ人情時勢ノ宜キニ適シ先後緩急ノ分ヲ  
審ニシ順次ニ細議シ以テ聞セヨ朕親シク之ヲ裁決セ  
ン

○可否ヲ獻替セシムル詔 太政官日誌  
明治二年四月

朕嚮ニ汝百官群臣ト五事ヲ掲ケ天地神明ニ質シ綱紀



ヲ皇張シ億兆ヲ綏安スルヲ誓フ然ルニ兵馬倉卒未タ  
其績ヲ底サス朕夙夜上ハ以テ神明ニ畏レ下ハ以テ億  
兆ニ慙ツ今ヤ乃チ親臨汝百官群臣ヲ朝會シ大ニ施設  
スルノ方法ヲ諮詢ス是神州安危ノ決今日ニ在リ誠ニ  
宜ク腹心ヲ披キ肺肝ヲ表シ可否ヲ獻替スヘシ朕將ニ  
勵精竭力大ニ經始スル所アラントス汝百官群臣ソレ  
勗哉

○公選ノ法ヲ設ケ更ニ輔相議定參與

ヲ登庸スル詔明治政覽  
明治二年五月十三日

朕惟ニ治亂安危ノ本ハ任用其人ヲ得ト不得トニアリ

故ニ今敬テ列祖ノ靈ニ告ク公選ノ法ヲ設ケ更ニ輔相  
議定參與ヲ登庸ス神靈降鑑過ナカラントヲ期ス汝  
衆ソレ斯意ヲ奉セヨ

○皇靈遷座ノ詔太政官日誌  
明治四年九月十四日

朕恭ク惟ミルニ神器ハ天祖威靈ノ憑ル所歷世聖皇ノ  
奉シテ以テ天職ヲ治メ玉フ所ノ者ナリ今ヤ朕不逮ヲ  
以テ復古ノ運ニ際シ忝ク鴻緒ヲ承ク新ニ  
神殿ヲ造リ神器ト列聖皇靈トヲココニ奉安シ仰テ以  
テ萬機ノ政ヲ視ントス爾群卿百僚其レ斯旨ヲ體セヨ

○議院憲法頒布ノ詔太政官日誌  
明治七年五月二日



朕踐祚ノ初神明ニ誓ヒシ旨意ニ基キ漸次ニ之ヲ擴充シ全國人民ノ代議人ヲ召集シ公議輿論ヲ以テ律法ヲ定メ上下協和民情暢達ノ路ヲ開キ全國人民ヲシテ各其業ニ安ンシ以テ國家ノ重キヲ擔任スヘキノ義務アルヲ知ラシメンコトヲ期望ス故ニ先ツ地方長官ヲ召集シ人民ニ代テ協同公議セシム乃チ議院憲法ヲ頒布ス各員其レ之ヲ遵守セヨ

○元老院大審院ヲ置ク詔 太政官日誌 明治八年四月十四日

朕即位ノ初首トシテ群臣ヲ會シ五事ヲ以テ神明ニ誓ヒ國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ求ム幸ニ祖宗ノ靈ト群

臣ノカトニ頼リ以テ今日ノ小康ヲ得タリ顧ニ中興日淺ク内治ノ事當ニ振作更張スヘキ者少シトセス朕今誓文ノ意ヲ擴充シ竝ニ元老院ヲ設ケ以テ立法ノ源ヲ廣メ大審院ヲ置キ以テ審判ノ權ヲ鞏クシ又地方官ヲ招集シ以テ民情ヲ通シ公益ヲ圖リ漸次ニ國家立憲ノ政體ヲ立テ汝衆庶ト俱ニ其慶ニ頼ント欲ス汝衆庶或ハ舊ニ泥ミ故ニ慣ルルコト莫ク又或ハ進ムニ輕ク爲スニ急ナルコト莫ク其レ能ク朕カ旨ヲ體シテ翼贊スル所アレ

○地方官會議ヲ開ク詔 太政官日誌 明治八年六月二十日



茲ニ地方官會議ノ始朕親ヲ臨テ汝各官等ニ詔ク朕經國治民ノ易カラサルヲ思ヒ深ク公論衆議ニ望ムコトアリ今汝各地方官ノ重任ニ居リ親ク民情ヲ知ル誠ニ能ク同心協力シ事緒多端ナルモ務テ其急ヲ先ニシ議論異同アルモ要スルニ其歸ヲ一ニシテ專ラ衆庶ノ爲ニ公益ヲ圖ラハ則チ斯會ヤ國家無疆ノ幸福ヲ開クノ始タラン汝各官其レ斯旨ヲ體セヨ

○元老院ヲ開ク詔 太政官日誌 明治八年七月五日

本日朕茲ニ親臨シテ始テ本院ヲ開キ爾衆官ニ詔ク朕前日衆庶ニ告クルニ元老院ヲ設ケテ立法ノ源ヲ廣ム

ルノ旨ヲ以テシ乃爾衆議官ヲ以テ立法官タラシム尙クハ爾等各乃ノ心力ヲ一ニシ乃ノ職任ヲ盡シ允ニ上下ノ康福ヲ圖ラハ實ニ國家無疆ノ休ナリ欽テ此意ヲ體シテ其能贊襄セヨ

○元老院議長熾仁親王へ國憲起草ノ

詔 寤寐漫筆 明治九年九月六日

朕爰ニ我建國ノ體ニ基キ廣ク海外各國ノ成法ヲ斟酌シテ以テ國憲ヲ定メントス汝等之カ草按ヲ起創シ以テ聞セヨ朕將ニ之ヲ撰ハントス

○明治二十三年ヲ期シ國會開設ノ勅



諭

寤寐漫筆  
明治十四年十月十二日

朕祖宗二千五百有餘年ノ鴻緒ヲ嗣キ中古紐ヲ解クノ  
乾綱ヲ振張シ大政ノ統一ヲ總攬シ又夙ニ立憲ノ政體  
ヲ建テ後世子孫繼クヘキノ業ヲ爲サンコトヲ期ス嚮  
ニ明治八年ニ元老院ヲ設ケ十一年ニ府縣會ヲ開カシ  
ム此レ皆漸次基ヲ創メ序ニ循テ歩ヲ進ムルノ道ニ由  
ルニ非サルハ莫シ爾有衆亦朕カ心ヲ諒トセン  
顧ミルニ立國ノ體國各宜キヲ殊ニス非常ノ事業實ニ  
輕舉ニ便ナラス我祖我宗照臨シテ上ニ在リ遺烈ヲ揚  
ケ洪模ヲ弘メ古今ヲ變通シ斷シテ之ヲ行フ責朕カ躬

ニ在リ將ニ明治二十三年ヲ期シ議員ヲ召シ國會ヲ開  
キ以テ朕カ初志ヲ成サントス今在廷臣僚ニ命シ假ス  
ニ時日ヲ以テシ經畫ノ責ニ當ラシム其組織權限ニ至  
テハ朕親ラ衷ヲ裁シ時ニ及テ公布スル所アラントス  
朕惟フニ人心進ムニ偏シテ時會速ナルヲ競フ浮言相  
動カシ竟ニ大計ヲ遺ル是レ宜シク今ニ及テ謨訓ヲ明  
徵シ以テ朝野臣民ニ公示スヘシ若シ尙故サラニ躁急  
ヲ爭ヒ事變ヲ煽シ國安ヲ害スル者アラハ處スルニ國  
典ヲ以テスヘシ特ニ茲ニ言明シ爾有衆ニ諭ス

○陸海軍々人へ勅諭

寤寐漫筆  
明治十五年一月四日



我國ノ軍隊ハ世々天皇ノ統率シ給フ所ニソアル昔神武天皇躬ツカラ大伴物部ノ兵トモヲ率井中國ノマツロハヌモノトモヲ討チ平ケ給ヒ高御座ニ即カセラレテ天下ジロシメシ給ヒシヨリ二千五百有餘年ヲ經ヌ此間世ノ様ノ移リ換ルニ隨ヒテ兵制ノ沿革モ亦屢ナリキ古ハ天皇躬ツカラ軍隊ヲ率ヒ給フ御制ニテ時アリテハ皇后皇太子ノ代ラセ給フコトモアリツレト大凡兵權ヲ臣下ニ委ネ給フコトハナカリキ中世ニ至リテ文武ノ制度皆唐國風ニ倣ハセ給ヒ六衛府ヲ置キ左右馬寮ヲ建テ防人ナト設ケラレシカハ兵制ハ整ヒタ

レトモ打續ケル昇平ニ徇レテ朝廷ノ政務モ漸ク文弱ニ流レケレハ兵農ヲノツカラニ分レ古ノ徵兵ハイツトナク壯兵ノ姿ニ變リ遂ニ武士トナリ兵馬ノ權ハ一向ニ其武士トモノ棟梁タル者ニ歸シ世ノ亂ト共ニ政治ノ大權モ亦其手ニ落チ凡七百年ノ間武家ノ政治トハナリヌ世ノ様ノ移リ換リテ斯ナレルハ人力モテ挽回スヘキニアラストハイヒナカラ且ハ我國體ニ戻リ且ハ我祖宗ノ御制ニ背キ奉リ淺間敷次第ナリキ降リテ弘化嘉永ノ頃ヨリ徳川ノ幕府其政衰へ剩外國ノ事トモ起リテ其侮リヲモ受ケヌヘキ勢ニ迫リケレハ



朕カ皇祖仁孝天皇皇考孝明天皇イタク宸襟ヲ惱シ給  
 ヒシコソ辱クモ又惶ケレ然ルニ朕幼クシテ天津日嗣  
 ナ受タシ初征夷大將軍其政權ヲ返上シ大名小名其版  
 籍ヲ奉還シ年ヲ經スシテ海内一統ノ世トナリ古ノ制  
 度ニ復シヌ是文武ノ忠臣良弼アリテ朕ヲ補翼セル功  
 績ナリ歷世祖宗ノ專蒼生ヲ憐ミ給ヒシ御遺澤ナリト  
 イヘトモ併我臣民ノ其心ニ順逆ノ理ヲ辨ヘ大義ノ重  
 キヲ知レルカ故ニコソアレサレハ此時ニ於テ兵制ヲ  
 更メ我國ノ光ヲ耀サント思ヒ此十五年カ程ニ海陸軍  
 ノ制ヲハ今ノ様ニ建定メヌ夫兵馬ノ大權ハ朕カ統フ

ル所ナレハ其司司ヲコソ臣下ニハ任スナレ其大綱ハ  
 朕親之ヲ攬リ肯テ臣下ニ委ヌヘキモノニアラス子々  
 孫々ニ至ルマテ篤ク斯旨ヲ傳ヘ天子ハ文武ノ大權ヲ  
 掌握スルノ義ヲ存シテ再中世以降ノ如キ失體ナカラ  
 シコトヲ望ムナリ朕ハ汝等軍人ノ大元帥ナルソサレ  
 ハ朕ハ汝等ヲ股肱ト頼ミ汝等ハ朕ヲ頭首ト仰キテソ  
 其親ハ特ニ深カルヘキ朕カ國家ヲ保護シテ上天ノ惠  
 ニ應シ祖宗ノ恩ニ報ヒマキラスル事ヲ得ルモ得サルモ汝等  
 軍人カ其職ヲ盡スト盡ササルトニ由ルソカシ我國ノ  
 稜威振ハサルコトアラハ汝等能ク朕ト其憂ヲ共ニセ



ヨ我武維揚リテ其榮ヲ耀サハ朕汝等ト其譽ヲ俱ニス  
 ヘシ汝等皆其職ヲ守リ朕ト一心ニナリテ力ヲ國家ノ  
 保護ニ盡サハ我國ノ蒼生ハ永ク太平ノ福ヲ受ケ我國  
 ノ威烈ハ大ニ世界ノ光華トモナリヌヘシ朕斯モ深ク  
 汝等軍人ニ望ムナレハ猶訓諭スヘキ事コソアレイテ  
 ヤ之ヲ左ニ述ヘム

一軍人ハ忠節ヲ盡スヲ本分トスヘシ凡生ヲ我國ニ稟  
 クルモノ誰カハ國ニ報ユルノ心ナカルヘキ況シテ  
 軍人タラン者ハ此心ノ固カラテハ物ノ用ニ立テ得  
 ヘシトモ思ハレス軍人ニシテ報國ノ心堅固ナラサ

ルハ如何程技藝ニ熟シ學術ニ長スルモ猶偶人ニヒ  
 トシカルヘシ其隊伍モ整ヒ節制モ正クトモ忠節ヲ  
 存セサル軍隊ハ事ニ臨ミテ烏合ノ衆ニ同シカルヘ  
 シ抑國家ヲ保護シ國權ヲ維持スルハ兵力ニ在レハ  
 兵力ノ消長ハ是國運ノ盛衰ナルコトヲ辨ヘ世論ニ  
 惑ハス政治ニ拘ラス唯々一途ニ己カ本分ノ忠節ヲ  
 守リ義ハ山嶽ヨリモ重ク死ハ鴻毛ヨリモ輕シト覺  
 悟セヨ其操ヲ破リ不覺ヲ取り汚名ヲ受クルナカレ  
 一軍人ハ禮義ヲ正クスヘシ凡軍人ニハ上元帥ヨリ下  
 一卒ニ至ルマテ其間ニ官職ノ階級アリテ統屬スル



ノミナラス同列同級トテモ停年ニ新舊アレハ新任ノ者ハ舊任ノモノニ服従スヘキモノソ下級ノモノハ上官ノ命ヲ承ルコト實ハ直ニ朕カ命ヲ承ル義ナリト心得ヨ己カ隸屬スル所ニアラストモ上級ノモノハ勿論停年ノ己ヨリ舊キモノニ對シテハ總テ敬禮ヲ盡スヘシ又上級ノモノハ下級ノモノニ向ヒ聊モ輕侮驕傲ノ振舞アルヘカラス公務ノ爲ニ威嚴ヲ主トスル時ハ格別ナレトモ其外ハ務メテ懇ニ取扱ヒ慈愛ヲ專一ト心掛ケ上下一致シテ王事ニ勤勞セヨ若軍人タルモノニシテ禮義ヲ紊リ上ヲ敬ハス下

ヲ惠マスシテ一致和諧ヲ失ヒタランニハ雷ニ軍隊ノ蠱毒タルノミカハ國家ノ爲ニモユルシ難キ罪人ナルヘシ

一軍人ハ武勇ヲ尙フヘシ夫武勇ハ我國ニテハ古ヨリモ貴ヘル所ナレハ我國ノ臣民タランモノ武勇ナクテハ叶フマシ況シテ軍人ハ戰ニ臨ミ敵ニ當ルノ職ナレハ片時モ武勇ヲ忘レテヨカルヘキカサハアレ武勇ニハ大勇アリ小勇アリテ同カラス血氣ニハヤリ粗暴ノ振舞ナトセンハ武勇トハ謂ヒ難シ軍人タランモノハ常ニ能ク義理ヲ辨ヘ能ク膽力ヲ練リ思



慮ヲ殫シテ事ヲ謀ルヘシ小敵タリトモ侮ラス大敵  
 タリトモ懼レス己カ武職ヲ盡サムコソ誠ノ大勇ニ  
 ハアレサレハ武勇ヲ尙フモノハ常々人ニ接スルニ  
 ハ溫和ヲ第一トシ諸人ノ愛敬ヲ得ムト心掛ケヨ由  
 ナキ勇ヲ好ミテ猛威ヲ振ヒタラハ果ハ世人モ之ヲ  
 忌嫌ヒテ豺狼ナトノ如ク思ヒナン心スヘキコトニ  
 コソ

一軍人ハ信義ヲ重ンスヘシ凡信義ヲ守ルコト常ノ道  
 ニハアレトワキテ軍人ハ信義ナクテハ一日モ隊伍  
 ノ中ニ交リテアランコト難カルヘシ信トハ己カ言

ヲ踐行ヒ義トハ己カ分ヲ盡スナイフナリサレハ信  
 義ヲ盡サント思ハハ始ヨリ其事ノ成シ得ヘキカ得  
 ヘカラサルカヲ審ニ思考スヘシ臆氣ナル事ヲ假初  
 ニ諾ヒテヨシナキ關係ヲ結ヒ後ニ至リテ信義ヲ立  
 テントスレハ進退谷リテ身ノ措キ所ニ苦ムコトア  
 リ悔ユトモ其詮ナシ始ニ能々事ノ順逆ヲ辨ヘ理非  
 ヲ考ヘ其言ハ所詮踐ムヘカラスト知リ其義ハトテ  
 モ守ルヘカラスト悟リナハ速ニ止ルコソヨケレ古  
 ヨリ或ハ小節ノ信義ヲ立テントテ大綱ノ順逆ヲ誤  
 リ或ハ公道ノ理非ニ踐迷ヒテ私情ノ信義ヲ守リア



タラ英雄豪傑トモカ禍ニ遭ヒ身ヲ滅シ屍ノ上ノ汚  
 名ヲ後世マテ遺セルコト其例尠カラヌモノヲ深ク  
 警メテヤハアルヘキ  
 一軍人ハ質素ヲ旨トスヘシ凡質素ヲ旨トセサレハ文  
 弱ニ流レ輕薄ニ趨リ驕奢華靡ノ風ヲ好ミ遂ニハ貪  
 汚ニ陥リテ志モ無下ニ賤クナリ節操モ武勇モ其甲  
 斐ナク世人ニ爪ハシキセララル迄ニ至リヌヘシ其  
 身生涯ノ不幸ナリトイフモ中々愚ナリ此風一タヒ  
 軍人ノ間ニ起リテハ彼ノ傳染病ノ如ク蔓延シ士風  
 モ兵氣モ頓ニ衰ヘヌヘキコト明ナリ朕深ク之ヲ懼

レテ曩ニ免黜條例ヲ施行シ略此事ヲ誠メ置キツレ  
 ト猶モ其惡習ノ出ニコトヲ憂ヒテ心安カラネハ故  
 ニ之ヲ訓フルソカシ汝等軍人ユメ此訓誡ヲ等閑ニ  
 ハ思ヒソ

右ノ五箇條ハ軍人タランモノ暫モ忽ニスヘカラスサ  
 テ之ヲ行ハンニハ一ノ誠心コソ大切ナレ抑此五箇條  
 ハ我軍人ノ精神ニシテ一ノ誠心ハ又五箇條ノ精神ナ  
 リ心誠ナラサレハ如何ナル嘉言モ善行モ皆ウハヘノ  
 裝飾ニテ何ノ用ニカハ立ツヘキ心タニ誠アレハ何事  
 モ成ルモノソカシ況シテヤ此五箇條ハ天地ノ公道人



倫ノ常經ナリ行ヒ易ク守リ易シ汝等軍人能ク朕カ訓ニ遵ヒテ此道ヲ守リ行ヒ國ニ報ユルノ務ヲ盡サハ日本國ノ蒼生舉リテ之ヲ悅ヒナン朕一人ノ懌ノミナラシヤ

○伊藤參議ヲ歐洲へ派遣シ立憲國ノ

情形ヲ觀察セシムル勅語

法規分類大全  
明治十五年三月三日

朕明治十四年十月十二日ノ詔旨ヲ履ミ立憲ノ政體ヲ大成スルノ規模ハ固ヨリ一定スル所アリト雖其經營措畫ニ至テハ各國ノ政事ヲ斟酌シテ以テ采擇ニ備ルノ要用ナルカ爲ニ今爾ヲシテ歐洲立憲ノ各國ニ至リ

其政府又ハ碩學ノ士ト相接シ其組織及實際ノ情形ニ至ルマテ觀察シテ餘蘊無カラシメントス茲ニ爾ヲ以テ特派理事ノ任ニ當ラシメ爾カ萬里ノ行ヲ勞トセスシテ此重任ヲ負擔シ歸朝スルヲ期ス

○幼學綱要頒賜ノ勅諭

癡癡漫筆  
明治十五年十二月

彝倫道德ハ教育ノ主本我朝支那ノ專ラ崇尚スル所歐米各國モ亦修身ノ學アリト雖之ヲ本朝ニ採用スル未タ其要ヲ得ス方今學科多端本末ヲ誤ル者鮮カラス年少就學最モ當ニ忠孝ヲ本トシ仁義ヲ先ニスヘシ因テ儒臣ニ命シテ此書ヲ編纂シ群下ニ頒賜シ明倫修德ノ



要茲ニ在ル事ヲ知ラシム

○内閣改制ノ詔官報明治十八年十二月二十三日

朕惟フニ經國ノ要ハ官其制ヲ定メテ機關各其所ヲ得ルニ在リ内閣ハ萬機親裁專ラ統一簡捷ヲ要スヘシ今其組織ヲ改メ諸大臣ヲシテ各其重責ニ當ラシメ統フルニ内閣總理大臣ヲ以テシ以テ從前各省太政官ニ隸屬シ上申下行經由繁復ナルノ弊ヲ免レシム乃各部ニ至テハ官守ヲ明ニシ以テ濫弊ヲ除キ選叙ヲ精クシ以テ才能ヲ待チ繁文ヲ省キ以テ淹滯ヲ通シ冗費ヲ節シ以テ急要ヲ舉ケ現律ヲ嚴ニシ以テ官紀ヲ肅ニシ徐カ

ニ以テ施政ノ整理ヲ圖ラントス是レ朕カ諸大臣ニ望ム所ナリ中興ノ政一タヒハ進ミ一タヒハ退クヘカラス華ヲ去リ實ヲ務メ綱舉リ目張リ永遠繼クヘカラシム諸臣其レ各朕カ意ヲ體シテ奉行スル所アレ

○皇室典範ヲ定ムル詔憲法明治二十二年二月十一日

天佑ヲ享有シタル我カ日本帝國ノ寶祚ハ萬世一系歷代繼承シ以テ朕カ躬ニ至ル惟フニ祖宗肇國ノ初大憲一タヒ定マリ昭ナルコト日星ノ如シ今ノ時ニ當リ宜ク遺訓ヲ明徵ニシ皇家ノ成典ヲ制立シ以テ丕基ヲ永遠ニ鞏固ニスヘシ茲ニ樞密顧問ノ諮詢ヲ經皇室典範



ヲ裁定シ朕カ後嗣及子孫ヲシテ遵守スル所アラシム

○教育ノ詔

官報  
明治二十三年十月三十日

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹  
ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心  
ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精  
華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝  
ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ  
博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ  
德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ  
重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天

壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良  
ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰ス  
ルニ足ラン

斯道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱  
ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ  
施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ  
一ニセンコトヲ庶幾フ

○衆議院ノ上奏ニ答ヘ併セテ在廷ノ

臣僚ニ告ル勅

官報  
明治二十六年二月十日

古者皇祖國ヲ肇ムルノ初ニ當リ六合ヲ兼ネ八紘ヲ掩



フノ詔アリ朕既ニ大權ヲ總攬シ藩邦ノ制ヲ廢シ文武ノ政ヲ革メ又宇内ノ大勢ヲ察シ開國ノ國是ヲ定ム爾來二十有餘年百揆ノ施設一ニ皆祖宗ノ遠猷ニ率由シ以テ臣民ノ康福ヲ増シ國家ノ隆昌ヲ圖ラムトスルニ外ナラス

朕又議會ヲ開キ公議ヲ盡シ以テ大業ヲ翼贊セシメムコトヲ期シタリ而シテ憲法ノ施行方ニ初步ニ屬ス始テ慎ミ終テ克クシ端ヲ今日ニ正シ大成ヲ將來ニ期セサルヘカラス顧ルニ宇内列國ノ進勢ハ日一日ヨリ急ナリ今ノ時ニ當リ紛爭日ヲ曠クシ遂ニ大計ヲ遺シ以

テ國運進張ノ機ヲ誤ルカ如キコトアラハ朕カ祖宗ノ威靈ニ奉對スルノ志ニ非ス又立憲ノ美果ヲ收ムルノ道ニ非サルナリ朕ハ在廷ノ臣僚ニ信任シテ其ノ大事ヲ終始セムコトヲ欲シ又人民ノ選良ニ倚藉シテ朕カ日夕ノ憂虞ヲ分ツコトヲ疑ハサルナリ

憲法第六十七條ニ掲ケタル費目ハ既ニ正文ノ保障スル所ニ屬シ今ニ於テ紛議ノ因タルヘカラス但シ朕ハ特ニ閣臣ニ命シ行政各般ノ整理ハ其ノ必要ニ從ヒ徐口ニ審議熟計シテ遺算ナキヲ期シ朕カ裁定ヲ仰カシム



國家軍防ノ事ニ至テハ苟モ一日ヲ緩クスルトキハ或  
ハ百年ノ悔ヲ遺サム朕茲ニ内廷ノ費ヲ省キ六年ノ間  
毎歲三十萬圓ヲ下付シ又文武ノ官僚ニ命シ特別ノ情  
狀アル者ヲ除ク外同年月間其ノ俸給十分一ヲ納レ以  
テ製艦費ノ補足ニ充テシム  
朕ハ閣臣ト議會トニ倚リ立憲ノ機關トシ其ノ各權域  
ヲ慎ミ和協ノ道ニ由リ以テ朕カ大事ヲ輔翼シ有終ノ  
美ヲ成サムコトヲ望ム

國家組織の形式たる帝國憲法を運用するに、必らず舜倫道德の  
精神たる十七憲法を以てするに非ざれば、決して圓滿靈活なる  
國法を見ること能はずと云ふは、吾儕の夙に主張する所なり、然  
るに其の十七憲法たる、  
聖德皇太子の御製に出るを以て、或は之を輕々に看過し、甚しき  
は之を侮蔑する者あるに至る、蓋し是れ近世固陋偏僻なる儒者  
等の誣妄に欺誑せられて、未だ曾て皇太子の偉業洪德如何を辨  
知せざるに坐せるなり、誠に以て慙むべきの至なりとす、抑、古來  
皇太子を傳ふるもの、多くは僧徒の手に成れるを以て、或は信憑  
すべからざる者亦少しと爲さず、然れども日本書紀は是れ舍人  
親王の勅を奉して撰定したまふ所、我が國史の尤も正確なる者



とし、而して其の

推古天皇二十九年の下に曰く、春二月己丑朔癸巳半夜、麻戸豐聰耳皇子薨于斑鳩宮、是時諸王諸臣及天下百姓、悉長老如失愛兒、而鹽酢之味、在口不嘗、少壯者、如亡慈父母、以哭泣之聲、滿於行路、乃耕夫止耕、舂女不杵、皆日月失輝、天地既崩、自今以後、誰恃哉、其の徳化の深く人心に入れるの狀、以て觀るべきなり、儒者太宰純は常に佛法を排斥したる者なり、然れども其の著述せる辨道書に曰く、「本朝に道と云ふこと未だ有らず、萬うゐるゐしかりしに、三十一代用明天皇の皇子に、麻戸といへる聰明の人生れたまひ、書を読み學問したまひて、三十三代推古天皇の時、攝政の位に居したまひ、官職を定め衣服を制し、禮

樂を興して、國を治め民を導き、文明の化を天下に施したまへり、本朝に於て麻戸の功は、制作の聖とも謂ふべき人にて、聖徳太子と謚せられたるも、虚名にあらず云々、又方今尤も史學に長ぜりと稱せらるゝ、文學博士重野安繹、及び久米邦武、星野恒、三氏の同く編纂せられたる國史眼に曰く、「太子憲法十七條ヲ作ル主意ハ訓戒ニ在リ、君命臣行ノ道ヲ明ニシ、上和下睦ノ理ヲ説キ、禮信ヲ本トシ、忿欲ヲ絶チ、勸善懲惡賞罰必當、オヲ用ヒ民業ヲ勸ム、十七條ノ中小大兼舉ル、彼我ノ政教ヲ折中シテ、後世法令ノ標準タリ、」又曰く、「二十九年、太子斑鳩宮ニ薨ズ、歳四十九、天下哀惜シ、哭泣ノ聲、月ヲ踰エテ絶エズ、世ニ上宮法王ト稱シ、崇敬スルコト佛ノ如シ、天下其徳ニ風靡シ、麤豪ノ俗、化シテ慈仁トナル、當時柄臣跋扈シ、不軌ノ事アルモ、民心敢テ皇室ヲ離レズ、百世ノ後ニ至リ猶ホ



2320

164 45587

嚮慕已マザルモノハ太子德望ノ盛ナル國家ヲ維持スルノ效力多シト謂フベシ云々以上列舉する所皆公平正確の評論にして吾人依て以て皇太子の盛徳洪業如何を辨知すべきなり今や本會世態國情に感ずる所あり國憲を印行して同志に頒つに當り尙ほ彼の欺誑の深坑に沈淪して脱出すること能はざる者あらんを恐れ敢て一言を贅すること是の如し

明治壬寅五月

大内青巒識



四

明治三十五年六月十二日印刷  
 明治三十五年六月十五日發行  
 明治三十六年四月五日再版

國憲與附

並製

編輯者兼發行所 上宮教會

代表者 河瀬秀治

東京府下荏原郡南品川

印刷者 今村金次郎

東京市芝區露月町十八番地

印刷所 株式會社 秀英舍

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

發行所

東京市芝區露月町十八番地  
電話新橋三千二十七番

鴻盟社



